

本を選ぶ

NO.483 2025年(令和7年)8月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<https://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>岐路とY字路 再々

●司書の眼(第59回)

—揺らぐ「知の媒介者」としての役割—



岐路とY字路 再々

50年以上にわたりパリで新聞を売り歩いた男性がその功績をマクロン仏大統領から認められ、フランスの国家功労勲章を授与されることになったそう。男性はフランス最後の新聞売りとされ、マクロン氏も学生時代に買っていたという。新聞が早朝に宅配される日本とは事情が違う。7月14日は「しんぶん配達の日」。2013年に日本新聞販売協会が制定したそう。日経が電子版を創刊したのが2010年だから、紙媒体の新聞発行と配達について当時から危機感を持ったのかもしれない。新聞配達店が読者獲得のための勧誘に洗剤などを配って問題になった頃だったか。あくまで邪推だが。

新聞発行デジタル化に関して、読売は日経や朝日、毎日とは異なった戦略のようだ。紙媒体の新聞発行堅持にこだわり、デジタル版への全面移行を必ずしも目指してはいない。夕刊発行も止めない。各社の発行部数が急減するなか、読売の販売部数落ち込みもかなり顕著になってきている。この時代にあって健闘してはいるものの、発行部数世界第1位とばかり言っていられなくなる日が近い将来来るかもしれない。

2010年3月に新聞電子版の嚆矢を放った日経にわずかに遅れて朝日は2011年5月、毎日とは2015年に

それぞれ電子版を開始している。各紙が紙版購読とは別に電子版購読を別契約(別料金)とする一方で、立ち位置を異にする読売は、新聞購読者は同社サイトで登録すれば別途料金なしに電子版が読める読売新聞オンラインを2019年に開始している。

新聞電子版発行のための大改革の中心は印刷部門の職場改革だ。従来の新聞印刷に欠かせない活版印刷を止める、即ち活字を捨てるというグーテンベルク以来5世紀続いてきた技術の大転換だ。デジタル化されるまでの印刷現場には多くの部署が存在していた。先ずは「鋳造」。鉛を溶かして鋳型に入れ、活字を造りだす部署で、母型と呼ばれる様々な書体と大きさがもととなる。活字そのものを扱う「文選」は原稿に従って必要な活字を拾い上げていく。集められた活字は「植字」にまわり、組版という工程にうつる。各ページが組み上がると「紙型」取りとなる。紙型プレス機に組版をのせて、ドライマット用紙という紙型取り専用用紙をのせ高圧でプレスする。できあがった紙型からいよいよ鉛版に写し取られ印刷機に掛けられる。当時の印刷会社一般の印刷工程も同様だった。

各印刷工程の専従工員たちの多くが職場を失った。技術革新と人員削減の痛みは非情な岐路となる。現在ではAIが脅威となろうか。

「紙面ビューアー」を使ってみた。電子版ではないので機能としては最低限紙面を紙版と同様に読めるが、電子書籍と同じく紙をめくるような一覧性には欠ける。拡大できるのが利点か。(埜村太郎)

司書の眼 第59回

—— 揺らぐ「知の媒介者」としての役割 ——

鷹野 祐子

先日、所属関係施設の病院図書室の担当者が集まる研修会に参加した。どの病院図書室からも共通する課題があげられた。「図書委員会がなく意思決定が滞る」「購入費がどこから出ているか分からない」「医師が私物のように持ち出し雑誌が欠本になる」など、ため息と共に語られる。担当者たちは多くが非正規雇用で、図書館業務の経験も背景もさまざま。大学図書館で司書をしていた方が退職後に病院に来られた例もあれば、他の業務から偶然図書室に配属された方もいる。それぞれが、既存のマニュアルを手がかりに業務をこなし、指示系統が不明な作業に戸惑いながらも、日常の依頼に対応している。組織的な支援が乏しい中でも、病院担当者同士がお互い助け合いながら図書室を維持し、研修会は連帯感に満ちていた。

かつて病院では患者への情報リテラシー教育と患者図書室の一大ブームを作ったものだ。ある程度の病床がある病院では、公益財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価を定期的に受審しているが、最近になってこの評価項目に図書室の機能が記載されなくなり、図書室機能に関する管理側の意識が後退したようだ。「評価されないものに払う金はない」といったところか。たしかに患者への情報提供といった面でも、これだけ高齢者にもスマートフォンがいきなり、患者が必要とするほとんどの情報は、QRコードで行った先のWebサイトで動画やアニメで分かりやすく説明されているのならば、病院に紙資料がある必要はない。医師やコメディカルの求める情報も、ほとんどがオンライン・データベースに移り、検索結果から論文そのものも見られるし、そもそも紙で読むことが減ったので、文献の取り寄せやレファレンスサービスにおいて司書や図書室担当者の関与することが少なくなってきた。最後に残っている仕事といえば、学生への日々のレクチャーと購読雑誌の経理・アクセス管理、デジタル化されて

いない和雑誌を中心とする看護研究での紙の文献複写サービスくらいかもしれない。医療現場という常に前を向いた施設の中で、過去の資料はしばしばうす暗い倉庫に入れられ、ぎゅうぎゅうに配架されている専門書も誰に読まれているのかさえわからない。おそらく99.9%の資料は、この病院に所蔵していなくてもどこかの大きな医学図書館にあるだろう。そんなものはさっぱり廃棄してしまっ、新しい機能を付与したい。でもそのためにはそれを決定実行する組織がないとなあと考えつつ帰路についた。

大半は“読まれないままの本”

図書室の奥にある“読まれないままの本”について考えると、これらはかつて所属していた研究者が集めた資料であり、その研究にとっては当時必要なものであった貴重な資料である。しかし、時代とともに研究テーマが変わっていき、現在では誰も手を触れない資料が3分の2をしめる。これでは管理者にスペースの無駄といわれても仕方がない。とくに、バイオサイエンス分野にとって5年前の資料だってもう使い物にならないだろう。使うとしたら、古いメソッドを比較引用する時くらいで、それだって必要な時にオンラインジャーナルやドキュメントデリバリーで手に入られる。そうして年々手狭になる研究室の棚から、続々と古い本が図書室に移管されてくる。図書室としては、本は固定資産財産であるために、重複がなければ基本的に所蔵していく。たまた蔵書基準に照らして改版等を理由に除籍し、廃棄や個人へリサイクルされていく本もあるが、こんな古い研究の澱のような本に囲まれていると、過去の怨念というか研究者の執念に押しつぶされそうになる。利用されない本を保管しているよりも、一般専門書の人気ランキングか、研究にアイデアを与えるような資料だけでよいのではないかと思います。はじめ、改めて「所蔵資料とは何か」を考える。資

料は、今は眠っていても未来に光を当てる可能性がある。資料は、利用されて初めて「知」となるが、使われない資料で埋め尽くされた図書室が大事にされるだろうか。

時代は変わったのだ

医学雑誌は、かつての表紙はカラフルで、最新研究を題材とした新しいひらめきに満ちたものが多かった。最新号の雑誌に掲載されている“新しい発見”が、専門のデザイナーによって装丁され、美しい表紙が書架に並ぶと、研究者が定期的に毎月見に来たものだ。2024年12月4日号の *Science* の表紙は *Braarudosphaera bigelowii* (ビゲロイ) という藻だった。このサッカーボールのような正五角形の面をもつ正十二面体の立体様の生物の培養に独立研究者萩野博士が成功した。その藻は、大気中の8割を占める窒素を直接取り込む能力を獲得した生き物と分かり、世界の研究者の間で注目を集めている。驚いたことに、萩野博士は研究費を持たず、自宅に実験室を作り私財で研究していた。家族総出であちこちの海から海水を集めてきては、ビゲロイをさがし培養する。ところが、ビゲロイがうまく見つかったとしても長期に培養できなかった。ある時高知大の教授にアドバイスを受け、高知名産の「ところてん」のエキスをういた培地を用いたところ、世界初の培養に成功し、研究がグローバルに進んでいく。

2014年にノーベル物理学賞をとった下村脩博士は、オキアミの一種である海ほたるをあつめルシフェリンの精製と結晶化に成功した。そしてそのルシフェリンで発光すると考えられていたオワンクラゲを大量に採集し、緑色蛍光タンパク質 (GFP) を抽出するという地道な研究を重ねた。GFPは細胞内の動態を可視化する技術として生命科学を革新し、世界中の研究に応用されているが、成果の裏には膨大な試行錯誤と忍耐があることがわかる。図書室に眠る資料もまた、今は使われなくとも、未来の研究に光を与える可能性を秘めている。誰かが必要とするその時まで、静かに知を蓄える姿は、研究者の営みに通じるものがある。しかしその資料は現代では紙である必要はない。

アクセスすることができればいいのだ。誰も読まないかもしれない資料を“いつか誰かのためになるだろう”という気持ちで日々整理作業をすることにはもう利用者のニーズは存在しない。古色蒼然とした旧き良き図書室として、古い本の置き場としての価値を見出すこともよいと思うが、それは博物館に任せればよい。今の医学研究に必要とされているのは、時間と空間、研究分野に隔てられない高速の情報交換、AI、そして生身の人間同士の対話である。GFPが細胞内の動態を可視化したように、図書館資料もデジタル化や検索技術の進展によって、誰もがアクセスできる形で再び光を浴びるようになった。電子化された資料やオープンアクセスの学術論文は、研究者だけでなく市民にも新たな知的探究の扉を開き、さらに多くの情報を生み出していく。オンラインジャーナル化で「触れられない資料」は検索され引用される。雑誌の目次は見なくとも、引用やロコミでダイレクトに論文へ飛んでいく。図書館員の仕事として、新着雑誌目次情報提供サービスが主流だった時代もあるが、テレビの番組表がなくなったのと同じようにその姿を消した。

本当に意味のないもの？

研究所には1800年代からの雑誌が所蔵されている。背表紙は金の箔押し文字、ページの隅には細かい鉛筆の書き込み。大学図書室の古い所蔵印があるので、廃棄されたものを誰かがもらったのだろう。けれど、それを開いた瞬間、時間がゆっくりと流れ始める。紙のざらつき、古いフォント、微かな紙のにおい、高価そうな花布。手書きのメモに込められた思考の跡。“誰かがここで学び、考え、悩んでいた”という気配が立ち上がる。

"I wonder," he said to himself, "what's in a book while it's closed. Oh, I know it's full of letters printed on paper, but all the same, something must be happening, because as soon as I open it, there's a whole story with people I don't know yet and all kinds of adventures and deeds and battles. And sometimes there are storms at sea, or it takes you to strange cities and

countries. All those things are somehow shut up in a book. Of course you have to read it to find out. But it's already there, that's the funny thing. I just wish I knew how it could be."

(M. Ende 著『The Neverending Story』

(英語版より引用))

「不思議だな」と彼はひとりごちた。「本が閉じている間、中では何が起きているんだろう。もちろん、紙に印刷された文字が詰まっているってことはわかってる。でも、それだけじゃなくて、何かが起きているに違いない。だって、開いた途端に、まだ知らない人たちが出てきて、いろんな冒険や出来事や戦いが始まるんだ。嵐の海があったり、見知らぬ街や国に連れて行かれたりもする。そんなこと全部が、本の中に閉じ込められているんだ。もちろん、読まなきゃわからない。でも、それらはすでにそこにあるんだよ。不思議だなあ。どうしてそんなことができるのか、知りたいな。」

本には「物質としての記憶」が宿る。手触り、におい、書き込みは、かつて誰かが思考した痕跡であり、資料が人と関わった証でもある。デジタル資料にはこの“におい”がない。紙資料の価値は、「人が資料に触れることで生まれる思考の余白」にあるのかもしれない。PDFファイルは読み終えた瞬間に管理ソフトに格納され、物質との対話を減らす。情報収集は研究者同士の個人的な生身のコミュニケーションに移行される。冒頭の研修会での議論を思い出すと、本が持ち去られること、予算の不明瞭さ、それは単なる管理の問題ではなく、「図書室資料が軽んじられている」ことへの担当者たちの静かな叫びだったのだ。担当者たちは病院図書室の労働環境を改善したいのではなく、本を必要としない危機感を共有したい、そんな気がしてきた。

私は、図書室という空間が好きだ。文字が好きということかもしれない。オーディブルを聴いていても、目を閉じ、脇の裏でテキストを読んでいる。そして、自分の中にない文字列と出会う誰か

の記憶に触れる、それは静かで特別な体験だ。けれど、棚に並ぶすべての本が、そのような“出会い”をくれるわけではない。映画を手当たり次第観るように、心に響くものはほんのわずかでしかない。棚にならんだ背表紙、埃をまとったページ、検索されることのないタイトルは、“沈黙”している。だが、長く読まれない資料は、本当に「意味のない」ものなのだろうか？

医学図書室の書庫に並ぶ、1800年代の *Nature* や *Science* の製本雑誌。引用率が評価される現代では、古い論文は価値を失ったかのようだ。ある研究者が1976年の *Journal of Molecular Biology* を探していた。「理研の図書室にあるはずなのだが、紙での取り寄せが高くて」と彼は言った。こうして眠っていた論文が、再び“読まれる資料”となる瞬間に立ち会えると、「読まれなかったことはまだ必要とされていないだけ」と気を良くする。しかし、数年後数十年後にはこれらの紙資料もすべて廃棄され、電子資料としてサービスされるだろうことは想像に難くない。

1990年代以降、医学図書室では電子ジャーナルの導入が進み、紙媒体は姿を消した。クリックひとつで全文に即時アクセスでき、利用統計や契約管理は効率化された。トークンによる論文購入、PDFファイルのドキュメントデリバリーにより、“資料の所在”は曖昧になり、データでのみ示されるようになった。OA（オープンアクセス）ジャーナルが増えることで、誰でも無料で読める資料が増えた。「誰かが研究した資料」が洪水のようにインターネット上にあふれている。そんな時代に旧世紀の紙資料の役割とは何だろう。資料の分類法とは何の役にたつのだろうか。

Can I borrow this book?

図書室の評価は貸出冊数に偏りがりだが、「記録されない利用」もある。棚の前でじっと本を眺める学生や、昼休みにそっと雑誌を開く人。こうした静かな行為こそが、図書室に命を吹き込んでいく。ある研究者が学生を案内しながら言った。「この施設で一番きれいなのは実はこの図書室だけで

すよ」。研究者の予算獲得の厳しさがしのばれる発言である。

「蔵書はなくても困らない」。最近の医学系研究者の間で、この発言に驚くことはもうない。情報収集とアクセス技術を鍛えるほうが蔵書を構築するよりも有効だ。「無料で便利なアプリがたくさんある」から課金しない、これは若手研究リーダーの弁だ。大変合理的な選択だ。図書館員の「読むかもしれない」への執着は、今の合理性とは相容れない古い発想なのだ。

しかし、図書室で起こる「偶然の出会い」は時折研究の方向を変える。

「I'm a student. Can I borrow *this book*?

(学生なのですが、この資料は借りられますか?)」

それは最近寄贈された資料の山の一冊だった。受入登録作業もまだされていなかったの、あわててバーコードを貼る。図書館員は、誰かが読む可能性のある資料なら、その誰かのために将来の利用を予測して蓄積する。それは一種の職業的本能とも言える。研究者にとっての「資料」は今使えればよい。図書館員との違いは「時間軸のとらえ方の違い」にある。研究者は「現在」、図書館員は「未来」を軸に知を蓄積・運用する。

本を借りない来館者、蔵書構築に無関心な研究者、そしてデジタル化によって加速度的に流通する情報。こうした環境の中で、図書室が静かに

担ってきた「知の媒介者としての役割」は見えづらくなっている。

Do the hokey pokey

夏休みに熊本の阿蘇山にいった。阿蘇五岳は、仏様が仰向けに横たわっている姿といわれていて、仏様のちょうど臍(へそ)のところに火山活動が継続している中岳の火口があるという。訪れた日、運よく噴火警戒レベル1だったので火口付近まで行くことができた。エメラルドグリーンに輝く湯だまりは美しかった。もくもくと立ち上る湯煙は、硫黄臭を帯び、地球の息吹そのもののように感じられた。さながらイーハトーブ火山局のようだ。同時期にロシアのクラシェニンニコフ火山が600年ぶりに噴火し、カムチャッカ半島周辺に大きな津波被害を起こした。阿蘇山は2000年代にも何度も噴火をしている活火山だ。大きな被害が出ることはないよう、阿蘇神社にお参りしてびかびかの熊本空港から帰路についた。

そういえば泊まったホテルの裏に、阿蘇の力をあつめてスプーン曲げができるといわれる場所があり、物は試しと家族で挑戦してみた。すると、4人中2人のスプーンがくるくると(くねくねと?)曲がった。スプーンはよく見る文様のカレー用のスプーンで、曲がらなかった私にはどうも不思議でしかない。これも見えない力なのだろう。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

DMかたるく

ESTRELA

■2025年8月号
No.377/8月10日発行
B5判 64ページ
定価1,205円(税込)

〔特集〕令和7年国勢調査に向けて ―人口・産業の視点から

■国勢調査における5年前の常住地・現住地別人口の利用／
西郷 浩(早稲田大学政治経済学術院 教授)

■国勢調査でみる我が国の産業構造の変化
―歴史的な転回点を迎えるか―
菅 幹雄(法政大学経済学部 教授／同大学日本統計研究所 所長)

■令和7年国勢調査を目前にして／
総務省統計局 統計調査部 国勢統計課

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル 5階
TEL : 03-3234-7471 <https://www.sinfonica.or.jp/>

衛星データ vs 大衆文化

終わりがなくから面白い
宇宙考古学へようこそ

定価 2,750 円 (税込)
ISBN : 978-4-389-50160-0

歌舞伎って高尚な芸術？
いいえ違います！

物語の背景を知れば歌舞伎はもっと面白くなる！

究極の歌舞伎入門書

これぞ歌舞伎

定価 1,980 円 (税込)
ISBNコード : 978-4-389-50159-4

学びと教育の未来をめざして
清水書院

権丈善一

▶好評最新版

ちょっと気になる 社会保障 V4

データ刷新、新章を加えた第4版。生き抜くための基礎知識。 2750円



橋本 努 編著

環境思想入門

温暖化時代を生き抜くため、日本に環境思想を根づかせろ！ 3520円



勁草書房

TEL 03-3814-6861 *価格税込
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 <https://www.keisoshobo.co.jp>

Asian Wind

- アジアと日本、そして世界を繋ぐ「風」のように -

NO.1 2025 Summer

— Asian Wind —

■言語の壁を越えたK-POP

■アジア美術館

■アジアの本棚

■北京物語

■上海便り

■台湾の建造物

■アジアの世界遺産

— 亜細亞之風 —

■超越言語障碍のK-POP

■日本美術館

■日语教育探究

■日本書架

■東京漫歩

■亞洲の世界遺産

一般財団法人 霞山会 (文化事業部)

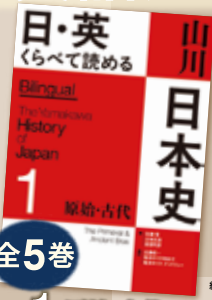
〒107-0052 東京都港区赤坂2-1-7-4 7

電話:03-5575-6301 / FAX:03-5575-6306

<https://www.kazankai.org/>

英語力×歴史力!

日・英くらべて読める
山川日本史



日本史教科書の
英語文と
日本語文を
くらべて読める!
バイリンガル
日本史

全5巻

1 原始・古代

2 中世

3 近世

著 佐藤 信 近藤成一
五味文彦 亀井ダイチ利永子
高笠利彦 亀井ダイチ アンドリュー

山川出版社



全てB5判、定価1,980円～2,420円(10%税込)

〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-13-13 <https://www.yamakawa.co.jp>

包括的支援 地域共生社会をつくる

菊池馨実・鍋木奈津子 編

包括的支援は、対象とする地域生活課題が幅広い領域にわたり、福祉以外の金融や教育、住宅、医療、災害対策、地域づくり等との連携が欠かせない。各領域の第一人者である研究者と実務家が、包括的支援とその体制構築へ向けて課題と展望を明らかにする。 A5判 定価3,300円



サイエンティスト・プラクティショナー入門

武藤 崇 編著

心理職をめざす人のために

堀越 勝・石山裕菜・大屋藍子 著

「エビデンスに基づく」とは? 「その人に寄り添う」とは? 心理職の「職責」や「倫理」を支える「科学者-実践家モデル」をはじめて学ぶ人のための教科書。理念からスキルまでを実践例もふまえ解説。(8月29日発売) 四六判 定価2,200円 y-knot シリーズ



有斐閣

東京都千代田区神田神保町2-17

価格は税込

阿川佐和子

1760円



だいたい

しあわせ



本人のイラストつき

爆笑と涙なくして読めない
阿川佐和子の日々のエッセイ

効果抜群! アガワ流 心の湿布薬。全国主要12紙で連載された大好評エッセイ、待望の書籍化。全篇友達に語るような筆致で綴られた、元気のでるエッセイ集。

晶文社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11
Tel 03-3518-4940 <https://www.shobunsha.co.jp/>



浅古泰史+善教将大【編著】

数理とデータ で読み解く 日本政治

9月下旬刊

複雑怪奇な日本の政治、政策が決まる過程を、数理モデルとデータを駆使して理解する。その知識とスキルをわかりやすく解説!

●予価2860円(税込) 978-4-535-54083-5

感染症との もう一つの闘い

一盛和世【編著】

WHOは世界中に蔓延る感染症をどう抑え込むのか? グローバルな視点からの闘い方を学ぶ。

WHOが
リンパ系フィラリア症に挑む

●予価2970円(税込)

978-4-535-98549-0

9月下旬刊



日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎03-3987-8621 <https://www.nipponyosha.co.jp>